

# サハリンアイヌの散文説話 tuytahについて

丹 菊 逸 治

## はじめに

アイヌ民族のうちサハリン<sup>(註1)</sup>南部を伝統的な居住地とする集団（以下サハリンアイヌと呼ぶ）は独自の方言と文化を保持していた。第二次世界大戦後人口の殆どが北海道へ「引き揚げ」ため生活基盤も大きく変り、現在では伝統文化も多くが失われている。□承文学研究も北海道に比して大きく遅れている。サハリンの散文説話には主要なジャンルとして、トウイタハ (tuytah) とウチャシコマ (ucaskoma) の二つがある。<sup>(註2)</sup> 両ジャンルは形式、内容に様々な違いがみられる。従来の記述の問題を指摘し、これまで重要視されなかつたトウイタハの挿入歌について述べる。

## 北海道のジャンル分類

まず北海道アイヌ□承文学のジャンル分類にふれておきたい。従来のサハリンのジャンル分類は基本的には北海道の分類を念頭においたものだからである。金田一京助、知里真志保によつて確立された分類は、現在でもその基本的な枠組みが踏襲されている。物語

性をもつジャンルは次のような形式的特徴によって分類される。

- ・1人称叙述（「私は～である」など）か3人称叙述か。またどのような人称接辞を用いるか。<sup>(註3)</sup>
- ・サケヘ (sakehe)「節」と呼ばれるリフレイン（「折り返し」と訳されることもある）があるか。<sup>(註4)</sup>

これらの特徴から次の三ジャンルに大別される。  
①英雄叙事詩 (yukar, sakorpe) : 旋律があつて、サケヘがなく、旋律にのせて歌われるか散文調で語られるか。<sup>(註5)</sup>

- 1人称形式 (-a-, -an) で語られる韻文物語

- ②神謡 (kamuyukar, oyma, sakorpe) : 旋律もサケヘもあり、1人称形式 (-ci-, -as) で歌われる韻文物語

- ③散文説話 (uvapeker, tuytak, isoytakki) : 旋律もサケヘもなく、1人称形式 (-a-, -an) で語られる散文物語

英雄叙事詩と神謡は音節数をそろえた韻文物語で、旋律にのせて歌われる。このうち神謡はさらにリフレインをつけて歌われる。英

雄叙事詩は少年英雄（ボイヤウンペなどと呼ばれる）の冒險を内容とし、神謡は神々同士または神々と人間の関わりを内容とする、とされる。散文説話ウウェペケレ (*uwepeler*) の内容は様々だが、金田一、知里らの分類では四つに下位分類される。

①神の散文説話・神が主人公でその1人称叙述形式。

②人間の散文説話・人間が主人公でその1人称叙述形式。

③和人の散文説話・<sup>(註6)</sup>和人が主人公で3人称叙述形式。

④バナンペ・ペナシベの散文説話・バナンペ、ペナシベという2人の登場人物の「隣の爺」型の話で3人称叙述形式。

このほかに北海道ではウパシクマ (*upaskuma*) とよばれる語りがあるが、これは「故事、由来を語る」という意味で、特定の形式をもたない語りであるとされる。したがって普通は形式的なジャンル分類からは外される。地名や事物の起源譚、散文説話とよく似た内容の物語である、とされる。

#### 先行研究におけるサハリンのジャンル分類

北海道の散文説話については資料が多く、現在でも口承文学を聞くイベントが開催されてもいる。一方サハリンの散文説話の資料は少なく、新たな採録はほぼ絶望的である。

研究がはじまつたのは北海道と比べて遅いわけではなく、ブロニスワフ・ピウスツキが一九一〇年代、知里真志保が主として一九四〇年代にサハリンで調査を行っている。最近では村崎恭子が一九八〇年代と一九八〇年代にサハリン出身の語り手から採録した多数の

□承文学テキストを発表している。<sup>(註7)</sup>彼らはテキストを発表するとともにジャンル分類を試みている。彼らは散文説話にトウイタハ、ウチャシコマの2ジャンルを認めた。大まかな分類はそれぞれの採用した訳語からも一致していることがわかる。例えばピウスツキはトウイタハに *fairy tales* 「おとぎ話」、ウチャシコマに *tales* 「話」という語をあてている。知里は留保つきながらもトウイタハに「昔話」、ウチャシコマに「本格的な散文物語」「首領談」「実歴談」などの語をあてている。両者ともに語り手（および聞き手）にとつてウチャシコマが「実話」とみなされ、トウイタハはそうではないらしいことに着目した。しかし、両ジャンルの形式的な定義となると各研究者の記述が一致しない。

#### ピウスツキが行つた、内容による分類

ピウスツキが一九一二年に刊行したウチャシコマ集には二十七話が収録されている。その序文に主として内容からみた各ジャンルの簡単な解説が付されている。一九九〇年になつてトウイタハ十一話、ウチャシコマ一話の遺稿が第2集として刊行された。<sup>(註8)</sup>ピウスツキによれば、ウチャシコマはアイヌ人にとっての「歴史」であり多くは、人名や実在した地名が登場する。彼はそれらをルルバ村の首長に関する伝承（以下「ルルバ譚」と呼ぶ）と、それ以外の伝承（以下「非ルルバ譚」と呼ぶ）の二種に分類した。<sup>(註9)</sup>前者は古い時代の出来事で、実話ではないと見え見なされるという。なお「ルルバ」という地名は、實際には存在しない。神謡については他の研究者と同じ

ような記述だが、英雄叙事詩とウチャシコマはサ・コロ・イタ(sa koro ita)「旋律をもつ語り」<sup>(註11)</sup>という語り方であるという。つまり英雄叙事詩とウチャシコマには、神譜とは異なった旋律があり、トウイタハには旋律がない、ということになる。彼はトウイタハの内容を五分類したが、具体的なテキストは前述の遺稿十一編のみである。

### 知里が行つた、人称形式による分類

知里はピウスツキのウチャシコマ集にさらに三十八話ほどの資料を加えてジャンル分類を行つた。<sup>(註12)</sup> 知里は言語学者であり、人称形式、語りの視点（神かそれとも人間か）・旋律、文体などによつて形式分類を試みた。彼はウチャシコマは1人称形式、トウイタハは3人称形式で語られる、とする。ただし実際の資料にはこの記述と矛盾する例がある。<sup>(註13)</sup> 知里はさらにウチャシコマの下位分類として語りの視点から「神のウチャシコマ」「人間のウチャシコマ」をたてた。<sup>(註14)</sup> トウイタハは3人称形式とされたため語りの視点ではなく、内容から分類している。知里はたんに北海道のジャンル分類をサハリンにあてはめたのではなく、前提としてピウスツキによるウチャシコマの2分類を形式上から再定義している。彼はピウスツキによる分類が人称形式の違いとほぼ重なることに気づいていたと思われる。つまりルルバ譚は全て1人称形式で、非ルルバ譚の大部分が3人称形式で語られる。知里は最終的に1人称形式のものだけをジャンルとしてのウチャシコマとし、3人称で語られるものを北海道と同様「形式的ジャンルをなさない」伝承として除外した（図1）。

図1 知里による散文説話の分類

		形式的ジャンルをなすもの		形式的ジャンルをなさないもの
北海道		トウイタハ (3人称)	ウチャシコマ (1人称)	ウパシクマ (3人称)
サハリン		ウウエペケレ		

### 知里による分類の問題点

知里的最終的な分類はすつきりしているが、具体例を示していない。また、ピウスツキとは異なる定義をしているのに、残念ながらその説明がない。実際に資料を検討すると次のような問題点がみえてくる。

- ①1人称と3人称のウチャシコマの区別は人称形式と文体のみによるのか。
- ②ウチャシコマにピウスツキの指摘する旋律はあるのか。
- ③人称形式の基準に反例（1人称のトウイタハ）がある。
- ④トウイタハとウチャシコマがともに3人称である場合の形式上の区別は可能か。

結論からいえば、①と②に関しては、1人称のウチャシコマのみに旋律があつた可能性がある。③トウイタハについては知里の人称形式の記述が正確でない。④については挿入歌の有無も重要である。以下ウチャシコマについては先行研究を整理し、トウイタハについて

ては資料整理の結果を示してこれらの問題について述べる。

### ウチャシコマの形式

前述したように、ウチャシコマのルルパ譚／非ルルパ譚は、1人称／3人称という形式上の区別とほぼ重なる。しかし、人称形式と内容は一部ずれており、少数だが「1人称形式の非ルルパ譚」が存在する。これらのウチャシコマは次の内容をもつ。

#### ①熊獵あるいは海獵に関する伝承（4例）

#### ②オタスツに関する伝承（2例）

#### ③人文神（sanayekuru）に関する伝承（1例）

#### ④その他（1例）

これらのうち、③と④に関しては北海道に移住した経験のあるいわゆる「対雁アイヌ」の伝承で、ピウスツキは北海道の影響であると指摘している。筆者もその指摘は妥当と考えるので①と②に内容が限定される。<sup>〔註18〕</sup>それに対して「3人称の非ルルパ譚」は内容が多様である。

### トウイタハの内容

ピウスツキはトウイタハの内容を次のように五分類した。

- ①人間のように生活しているが、獸の特徴をみせる動物の話
- ②動物、鳥類、魚類と人間の恋愛譚
- ③魔物、鬼が害をなす話
- ④奇想天外な冒險譚
- ⑤隣同士の2人の男の話

1人称形式のウチャシコマにはもうひとつ特徴があるようである。ウチャシコマの語り方についてピウスツキは英雄叙事詩と同様の「旋律をもつ語り」とした。一方、知里はトウイタハと同じく旋律のない語り方であるとした。<sup>〔註19〕</sup>彼らの採録した録音資料は少なく、それぞれの判断の根拠が明確でない。ピウスツキ資料の原註によれば、

イポホニ氏の伝承によるウチャシコマのうち3例に「学校の生徒の暗唱」のような旋律があるというが、これらは1人称形式である。<sup>〔註20〕</sup>藤村久和はピウスツキのウチャシコマ全話について新訳を行いサハリン西海岸出身者の助力をえて詳細な註を付した。それによれば西海岸でのウチャシコマは簡単な旋律をもつものが「正規」である、という。村崎も同様のことを述べている。村崎の録音資料には、浅井タケ氏の旋律にのせた語り出しの録音があるが、それはルルパ譚である。

これらのことから、少なくとも1人称形式のウチャシコマ（ルルパ譚、狩獵に関する内容）には簡単な旋律に乗せた語り方があつたようである。

ピウスツキ自身の遺稿には、ピウスツキの分類②③にはあてはまるテキストがあり、人間が登場する。ピウスツキの分類①にあてはまるであろう、人間の登場しないテキストもある。一方、知里の分類によればトウイタハの下位分類は次のようになる。

①「川下の者のトウイタハ」

②「和人のトウイタハ」

③エンチウ・トウイタハ (*enchiw-tuytah*)。文字どおりには「人間のトウイタハ」の意。①②以外のトウイタハ。

知里は具体例をあげていないが、知里の分類①がピウスツキの分類⑤に相当するのは間違いない。知里の分類③エンチウ・トウイタハ（「人間のトウイタハ」）はピウスツキの分類②③④に相当すると

思われる。そして知里の分類には、ピウスツキの分類①に相当する部分がない。このピウスツキの分類・は後述するように、村崎恭子の資料のうち挿入歌をもたないトウイタハに相当すると考えられる。

知里の分類では北海道のポン・ウパシクマ (*pon-tpaskuma*)「小さい・ウパシクマ」という短い起源譜がよく似た内容をもつ。知里は別のジャンルをたてるために、故意にこれらをトウイタハから除外したのかもしれない。なお、ピウスツキの分類④にあたるテキストは遺稿にみられない。知里の分類②と同様の外来要素を含んだテキストかとも思われるが推測でしかない。

### 内容からトウイタハと推定できるケース

知里の資料にはジャンル名が記載されていないことが多いが、内容からトウイタハと推測できるものもある。トウイタハにサヌベツに類似する地名がよく登場することは知里自身がすでに指摘して<sup>[註]22</sup>いた。村崎の採録したトウイタハの舞台も多くが「サンヌピシ (sanupis) 村」であるとされる。資料を検討すると、①ピウスツキ

一九九〇で定義に反して、地名とむすびつけられているのにトウイタハとされている（本来ならウチャシコマ）、②浅井氏のトウイタハの半分以上にサンヌビシ村が登場する、③知里資料でサヌペツ系の地名が登場する話のほとんどが結婚を主題としていて他の話と異なる、という三点がわかる。そこでこの地名の登場する話（以下サヌペツ譜と呼ぶ）はトウイタハとみなしておく。

### トウイタハの形式

知里は散文説話の文体の違いについて指摘している。1人称のウチャシコマはトウイタハと異なり「雅語文体」で語られるという。しかしわゆる「形式をなさない」3人称のウチャシコマの語り方についてはふれられていない。そのうえ実際の資料を検討すると1人称形式、3人称形式両方のトウイタハがあり、1人称のウチャシコマの一部にしか旋律は確認できない。つまり旋律、人称形式だけでは、散文ジャンルの形式上の区別としては不十分である。登場人物、語彙などさらにいくつかの違いもあるが、トウイタハのより一般的な特徴として「挿入歌」の存在があげられる。

### トウイタハの挿入歌に関する村崎の指摘

村崎は浅井タケ氏の伝承するトウイタハを三十八話採録し「必ず挿入歌を含む」と述べている。これは挿入歌に関する初めての指摘である。しかし村崎は「挿入歌」がどんなものか記述をしておらず、アイヌ歌謡ジャンルとの比較も行っていない。資料を検討すると、

挿入歌には以下のような形式があることがわかる。

に短いことが多い。

### 挿入歌の形式

ヘチレ (hecire)「踊り歌」やイフンケ (ihunke)「子守歌」など実際の歌謡ジャンルとよく似た形式を含め次の形式がある。

(1) 内部に繰り返しをもつもの

(A) .. 同じ行が二回以上繰り返されるもの

(B) .. 一部が異なる二種類の行が交互にあらわれるもの

(C) .. 上記の型に異なる形式の行が付加されたもの

(D) .. 複数行の前半あるいは後半に同じ繰り返しがあるもの

(E) .. 二種の行が交互にあらわれるもの

(F) .. 複合型

(2) 内部に繰り返しをもたないもの

(G) .. 全体が繰り返されるもの

(3) その他

(H) .. 擬態語・擬声語を含むだけのもの

これらの中のうち (A)(B)(C) は物語中でしばしばヘチレ (hecire) 「踊り歌」として登場する。(D) は神謡 (kamnyukar, oyna) やおもかげ形式である。物語中ではイフンケ (ihunke)「子守歌」とされるが、たんにユーカラ (yuukara)「歌」とされる。(E) は (A) ~ (C)

によく似たものだが例が少ない。(F) は単に「奇妙な音(魔物の

声)がした」という場面などで歌われる。(G) は例が少なく、日本

の昔話とよく似た話にみられる。(H) は動物の鳴き声などで、非常

なかには非常に短い挿入歌しかないトウイタハもある。村崎も「挿入歌が必ずある」と言い切るのに躊躇しているようである。しかし短くても挿入歌とみなせるものが多い。例えば

ica ica ieah wah

ica ica ieah wah

「汚い汚い汚い カア」  
汚い汚い汚い カア」

というカラスの台詞では、ica 「汚い」を繰り返すのに、wah 「カア」と鳴き声がはさまれるだけだが、これも挿入歌と思われる。最後が擬声語で終る同じ台詞が、同じような調子で繰り返されるが、この「擬声語」と「繰り返し」が挿入歌の大きな特徴である。トウイタハ中ではつきりと歌謡ジャンルとされたもの、およびそれに類似した形式のものが多いが、「鳴き声」とされたもの、複合型のもの、極端に短いものなども「挿入歌」とみなすのが妥当である。

さらに挿入歌のない話がある。それらは動物同士の話や、器物や自然の素材が主人公となる話である(雪女が登場するものもある)。これらはピウスツキのトウイタハの分類、「人間のように生活しているが、獸の特徴をみせる動物の話」にあたると思われる。

### 挿入歌の例

基本になるのは「繰り返し」と「擬態語」である。この2つの要素の両方、あるいは片方が必ずある。挿入歌はテキスト中でたんに

ユーチカラ「歌」とされたり、具体的なジャンル名で呼ばれることがある。実際のヘチレやイフンケと歌唱技法は異なるものの、それらに似た形式をもつてゐる。ヘチレとされるものは2行の繰り返しを基本とする。多くは歌詞の意味が不明だが対句的表現と思われる例もみられる。以下にアイヌ語原文例と日本語訳（推定が多いことをお断りしておく）を示す。擬態語部分はカタカナ表記した。

hoh hoh hoh kucirin kucirin kucirin naa

ПОЛ ПОЛ КИСЛИ КИСЛИ КИСЛИ

hoh kucirin kucirin kucirin

cihpo hokuhu miru atu tuy tuy

ПОЛ КУЧИК КУЧИК

「ピヨンピヨンピヨン チリンチリンチリン

千代（登場人物）の母が刃へと刃へ

二三六

参考ノ実祭のハチノ列

(A) 形式 同じ行が二回以上繰り返されるもの

pohpoki san etusu konna yonra yonra

ponpoki san etusu konna yonra yonra  
「← < 選べる」 etusu konna yonra yonra  
← < 選べる etusu konna yonra yonra」

(B) 形式。一部が異なる二種類の行が交互にあらわれるもの

(ヘチレとされる例)

hewketu kanne e hum

okesuh kann e hum

「hewketu គេគេ

okesuh オクスウ

(C) 形式。上記の型に異なる形式の行が付加されたもの  
(ヘチレとされる例)

実際のヘチレは二行あるいは三行のセットは一回きりではなく繰り返され、旋律や発声技法にもあるいどのバリエーションがある。トウイタハ中では一セットだけが同じ旋律で歌われ、技法的にも簡単なものとなっている。イフンケについても同様のこと�이える。

(D) 形式。複数行の前半あるいは後半に同じ繰り返しがあるもの  
(くチレとされる例)

(一)

yuhpo yuhpo

neampe kii yuh kusu makan pe

kohko rooro kohko rooro

ehawee ahkapo ahkapoo

haii nahpaa coorunte

monimah kuruka coorunte

oyookante coorunte

haii nahpaa coorunte

monimah kuruka coorunte

「アヘ mahpa 流された (?)」

母ちゃんに海に 流された (?)

裸や (?) 流された (?)

母ちゃんに海に 流された (?)」(かなりの推定)

これは歌い方から「coorunte」[流された (?)] ハラハリフレイ

ハやめの「神謡」のように聞えるが、トウイタハ中ではイフンケと  
されてくる。アイヌ歌謡に特徴的な発声技法を用いられる」とがな  
いためもあるだろう。

(二)

kohko rooro kohko rooro

nanna nanna

kohko rooro kohko rooro

nanna nanna

eha taa kusu makan

yuhpo yuhpo

neampe kii yuh kusu makan pe

kohko rooro kohko rooro

ehawee ahkapo ahkapoo

haii nahpaa coorunte

monimah kuruka coorunte

oyookante coorunte

haii nahpaa coorunte

monimah kuruka coorunte

「アヘ mahpa 流された (?)」

母ちゃんに海に 流された (?)

裸や (?) 流された (?)

母ちゃんに海に 流された (?)」(かなりの推定)

これは歌い方から「coorunte」[流された (?)] ハラハリフレイ

ハやめの「神謡」のように聞えるが、トウイタハ中ではイフンケと  
されてくる。アイヌ歌謡に特徴的な発声技法を用いられる」とがな  
いためもあるだろう。

(二)

coorunte や kohko rooro など)の繰り返しの間に、大抵は即興の歌

詞がはやみこまれるという形式は実際の子守歌と共通している。実  
際には子守歌と神謡の歌い方は大分異なる。神謡では音節をそろえ  
た「行」がより明確であり、歌詞も即興ではない。

(E) 形式。一種の行が交互にあらわれるもの

pukko harara pukko

cituhuhuseka sikenii oo pe

pukko harara pukko

「ボン harara ボン」

私は倒したよ、荷物を背負っていたのを（？）

ボン harara ボン」

(F) 形式。複合型

(日本語部分は地の文、アイヌ語の部分が歌われる)

次のように家の隅から何か声がして

poro cipe tokew

poro cipe tokew

ルンバ声がしたそуд、また家の別の隅から

akatutu akatutu

eani ka ahunuwa

neepoka ecieetoh

kukani kuahun nah

kuramuhe un

ルンバ声がしたそуд、そしてまたすぐ別の隅から

horokkeypo koh ramatuhu soyun soyun

horokkeypo koh ramatuhu soyun soyun

ルンバ声がしたそуд。

「次のように家の隅から何か声がして

(歌) 大めな cipe tokew (～)

(歌) 大めな cipe tokew (～)

ルンバ声がしたそуд、また家の別の隅から

(G) akatutu akatutu (～)

(歌) お前が入った

(歌) 何とかしてお前に先回りして

(歌) 俺が入ってやろう

(歌) と思うのだが、うむ

とふう声がしたそуд、そしてまたすぐ別の隅から

れることがある。同じ様なりズム、旋律で歌われることもあるれば、

それぞれ別の調子で歌われることもある。それぞれの部分が繰り返

しや擬声語などの要素をもつていても、内容的に連続している」と

が多いので全体を一つの挿入歌とみなしておく。

(G) 形式。全体が繰り返されるもの

kee puci ee horokkeypo

emusatuhu cirosik naa

suu cika hum

[kee puci ee (～) 男ぶ  
刀を上げる紐を引くれるね

suu cika (～) ルンバ】

(H) 形式。擬態語・擬声語を含むだけのもの

ommo omno wah

kueule kayeh wah

「母さん母さん カア」

僕のくちばしが折れたよ、カア」  
この2行はテキストとしては繰り返しを持たないが、同じ様な調子をつけて発話される。

文字資料にみられる挿入歌  
知里・ピウスツキの文字資料からは、「旋律」を確認することはできぬが、挿入歌らしきものはある。「挿入歌」とはつきり言い切れないにしても、トウイタハの文字資料には「繰り返し」と「擬態語」という要素が随所にみられ、それらはウチャシコマの文字資料には見られない。

### 結論

トウイタハとウチャシコマには、叙述の人物形式、語り方（旋律の有無）、文体、語彙、物語の舞台、登場人物の呼称など様々な点でちがいがみられるが、加えて挿入歌の有無をあげることができる。語り手が限定されるが、録音資料のトウイタハには挿入歌が確認される。文字資料でも挿入歌に類似した箇所が多く見られる。

おわりに

サハリンアイヌの口承文学についてはわからないことが多い。しかしピウスツキの遺稿の刊行、村崎恭子によるテキスト刊行などにより、研究資料は徐々に増加しつつある。また、口承文学以外にも伝統的な生活技術等の聞き取り作業が続けられている。今後新たな情報も得られると思われる。

(註1) サハリン島北緯五十度以南は第二次世界大戦終結までは日本領であり樺太庁が置かれていた。現在はロシア共和国サハリン州の行政管轄下にある。本稿ではこの地域を「サハリン南部」と呼ぶ。同地域とサハリンアイヌ人の居住地域とはほぼ重なる。

(註2) カナ表記の場合、アイヌ語の閉音節末子音p, t, k, r, s, m, nは小さな文字を用いるのが一般的だが、煩雑になるため、本稿では大きなままとした。

(註3) 従来よく行われてきた「1人称形式の語り」という記述に對しては、言語学の立場から見直すべきだという意見が出ている。アイヌ語の1人称接辞には<sub>en</sub>という単数形式の他に、複数形式が2種ある。そのひとつが不定人称に近く引用文などにも用いられる<sub>ni</sub>、<sub>in</sub>（4人称と呼ばることもある）である。散文説話で用いられるこの<sub>ni</sub>、<sub>in</sub>は、本質的には1人称ではなく引用文に近いというのである。しかし3人称による語りとは異なる。また神謡で用いられる<sub>ci</sub>、<sub>ias</sub>という別の1人称は引用文では用

いられない。本稿ではとりあえず1人称形式としておく。なお、ここでは北海道南西部方言形を用いた。

(註4) 「韻文」では音節数がそろえられる。押韻は殆どないので正確には「律文」とでもすべきだが、慣例に従い「韻文」という語を用いた。

(註5) 地方によってこれ以外の名称もある。

(註6) アイヌ人以外の日本人の呼称。現在でも用いられる。

(註7) 村崎恭子一九七六『カラフトアイヌ語—テキスト篇』(国書刊行会、一九七六年)、一九八九『樺太アイヌ語口承資料1』文部省科学研究費補助金研究成果報告書(北海道大学、一九八九年)、

一九九五『樺太アイヌ語口承資料2』文部省科学研究費補助金研究成績報告書(横浜国立大学、一九九五年)、一九九九『浅井タケ昔話全集(1)』(文部省科学研究費補助金研究成果報告書、一九九九年)、一〇〇〇『浅井タケ昔話全集(2)』(財団法人放送文化基金「放送メディアによる言語文化普及のための基盤研究」研究成果報告書、一〇〇〇年)

(註8) ピウスツキ一九一一: PILSUDSKI, Bronislaw, Materials for the study of the Ainu language and folklore. Cracow, 1912  
(註9) ピウスツキ一九〇〇: PILSUDSKI, Bronislaw ed KABANOV, Alexander M. and MAJEWICZ, Alfred F. Materials for the study of the Ainu language and folklore, vol. two. Poznan, 1990

(註10) 後者は sonno yay ayru ueaskoma 「本当に・ただの・人間の・伝承」。ピウスツキは sonno 「本当の」が ucaskoma 「伝承」を修飾していると解釈した。ノルでも同様に解釈しておいた。

(註11) この語をピウスツキは「休止をもつ語り」としたが、中川裕の指摘のように「旋律をもつ語り」と解釈すべきである。ピウスツキ一九一二『序文』、中川裕訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料・序文』『創造の世界』第四十六号(小学館、一九八三年)。

(註12) 知里一九四四「樺太アイヌの説話(一)」「知里真志保著作集第一巻」(平凡社、一九七三年)所収、初出「樺太アイヌの説話」「樺太序博物館彙報」第三卷第一号(豊原、一九四四年)など。

(註13) 知里の死後刊行されたピウスツキ一九九〇(前掲書)には1人称のトウイタハがある。知里資料でも1人称のサヌベツ譚が存在するが、知里がトウイタハに分類していたか否かは不明である。

(註14) 知里一九四四(前掲書)の時点では叙述主体が神であるか人間であるかを分類基準にしていない。知里真志保一九五五「アイヌの散文物語—川下の者の昔話」「北方文化研究報告」第十集(一九五五年)では北海道と並行的なジャンル分類が試みられているが、具体的な資料があげられていない。

(註15) 知里一九四四(前掲書)でのテキスト配列からこの時点では知里一九五五とは異なる分類が試みられていた。  
(註16) 知里一九五五(前掲書)での定義による。そこではテキストが具体的に示されていない。

(註17) ③に登場するサマイエクル(samayekuru)は北海道で登場する文化英雄の名。サハリンでは文化英雄はヤイレスー(ayresuu)と呼ばれるのが普通。④を語ったのは北海道生ま

れの少女である。

(註18) なお1人称形式のウチャシコマにヤイレスー<sup>1</sup>ポが登場するものが数例ある。「オタスフ(otashu)の首長」に関するウチャシコマがやはり1人称形式である。これらは「ルルパの首長」と同様ウチャシコマ特有の登場人物なのかも知らない。

(註19) 知里一九四八a「アイヌの歌謡(第一集)」「知里真志保著作集第2巻」(平凡社、一九七三年)所収、初出は日本放送協会編、東京、一九四八年。知里一九五五(前掲書)、知里一九六〇「アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する調査研究」「知里真志保著作集第2巻」(平凡社、一九七三年)所収、初出『文化財委託研究報告(2)』(文部省文化財保護委員会、一九六〇年)。ウチャシコマの旋律に関する知里とピウスツキの記述の差については丹菊逸治一九九九修士論文「サハリンアイヌの散文説話tuytahの形式について」(平成十一年度千葉大学文学研究科提出、未刊)でやや詳しく述べた。知里一九四八aではそれぞれのジャンルには特有の語りの旋律があるとされる。ウチャシコマに簡単な旋律があつても知里の記述と必ずしも矛盾しない。

(註20) ピウスツキ一九一二の藤村久和訳「B・ピウスツキ／樺太アイヌの言語と民話についての研究資料(1)～(30)」「創造の世界」vol.46～vol.84(小学館、一九八三年～一九九二年)。

(註21) 知里一九五五(前掲書)

(註22) 知里一九四八b「りくんべつの翁」「知里真志保著作集第1巻」(平凡社、一九七三年)所収。初出金田一京助と共に著『りくんべつの翁』(彰考書院、一九四八年)所収。「サヌペツ」樺太の昔

ばなしに出る主な村名の一つか、「サヌイペツと同じであろう」とある。

(註23) 村崎一〇〇〇の音声資料が一〇〇〇年九月現在インターネットで公開されている。<http://www.epr.bun.kyoto-u.ac.jp/>『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』(文部省科学研究費補助金)の「危機言語試験運用ページ」。(たんぶく・いつじ／千葉大学大学院)